

は　じ　め　に

鳥が空を飛ぶように、人間は大地で育ち、生きてきた。たとえ自動車・飛行機等の高度な科学技術の粋を集めた交通手段が発達し、いわゆる「車の時代」になろうとも、また就職や転職などで生地や自宅を離れて「ふるさと」を失なおうとも、人間はやはり本能的に自分の生きていく基盤となる「場所」を望んでいる。

確かに、人類史的に見れば、農耕時代に比べて工業時代（特に車の時代）には、人間は自分の生地から離れて転々とすることが多い。しかし、情報化社会といわれる現在、また脱工業化社会に入るといわれる近い将来には、一つの兆候として、電子技術等の発達に伴ない、日常的には出勤・移動などしなくても自宅で仕事ができ、また非日常的には旅行に出かけるなど、「遊び」を楽しむ余裕が、逆に人々に自分の「場所」に愛着と関心とを持たせる、という結果を生んでいるといえる。つまり、移動性志向の社会は漸次定住性志向の社会に変わるかもしれないが、何れにしても、自分が生活していく基盤となる「場所」への愛着・関心は不変である。

本論文は、財団法人第一住宅建設協会の委託による昭和54年度及び昭和55年度の「都市住民の居住地に対する愛着について」を基として、上記のような傾向や経過を各種の事情から明らかにし、かつ分析したものである。またそれが、結局人々の「場所」への定着を促すものであることを調査・研究したものである。

なお、本研究は、主として愛着性については、松井俊一が担当し、定住性（本論文の第2章以降）については、竹内寿一が担当したものであるが、愛着性については、別に第一住宅建設協会に提出した報告書があり、本論文の第1章は、それから抜粋、要約したものである。

早稲田大学名誉教授

武 基 雄